

# 国語科授業案

授業者 辻元 智

1 日時 令和7年11月20日(木)第5時 13:10~14:00

2 学級 2年B組 計36名

3 単元名 推論が成り立つための展開の工夫とは～論の展開方法や表現方法の理解を深める～

4 単元目標

・意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。

[知識及び技能](2)ア

・目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得ることで、内容を解釈することができる。

[思考力、判断力、表現力等]C(1)イ

・文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

[思考力、判断力、表現力等]C(1)オ

・言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。  
「学びに向かう力、人間性等」

5 本単元における言語活動

不確かなことに対する主張を読者に説得力をもって伝えるための筆者の推論の工夫を文章にまとめる。

6 単元観

本単元は、推論を使った論の読み取りを行う。その過程で、主張の説得力を高める有効な文章の論理展開の仕方について考え、不確かなことに対しても説得力ある主張を可能にするということの理解をねらいとしている。

教材である『ガイアの知性』において、筆者は「人間は鯨や象の知性から学ぶことで「ガイアの知性」へと進化していくことが必要だ」と主張している。人々は一般的に、この地球上で「人間こそ最も知性の高い生き物である」と考えているだろう。だから、読者はこの主張を受け入れがたいはずだ。しかし、本文を読み終えた読者は筆者の主張にある程度うなずいてしまうこととなる。それは筆者が、読者の当然抱くであろう思考(反論)を想定してその考えに寄り添いつつ、既知の事実をもとに慎重に自分の意見を展開している(推論している)からである。

筆者は、鯨や象に人間と同等の高度な「知性」が備わっていることを事実をもとに伝えたい一方で、動物と人間はそれぞれ別種の「知性」を有しているのではないかという仮説を立てている。本来、筆者はこの仮説を立てるまでもなく、象や鯨がもつ「受容的な知性」から我々人間が学ぶべきであるという確固たる考えをもっているはずだ。だが、序論や本論の段階ではあくまでも読者に寄り添い、断定的な表現を極力避けながら意見を織り交ぜる形をとっている。そして、鯨や象がもっている「知性」と人がもつ「知性」とは「別種の知性」であると仮定している。このような展開により、読者が「人間が鯨や象よりも劣っていると誤解されることを回避している。その後、この仮説を3つの事例で検証していくが、事例の中にも推論(事実の積み重ねから考えられること)を使って主張にかかわる意見を述べ、最終的な主張に説得力をもたせている。各所に推論を巧みに織り交ぜることで、読者が最初に抱いている人間優位の考え方が少しずつ解かれ、主張について考えさせる、非常に優れた論理展開が成されているといえる。

ところで、「推論」とは、あくまで筆者の中で「意図的に選ばれた事例」によって支えられた、いわば筆者独自の論証である。したがって、批判的な視点をもって読んでいくと、当然反論は見つがってくると考えられる。しかし、中学2年生の段階では、筆者の推論に対して批判的に捉え、論理展開について自分の考えを形成していく単元としての性格はもたせず、あくまで筆者の論理展開の工夫を「味わい、吸収する」という学習活動を考えている。そして、3年生で「正しく読んだ上で展開方法やその内容を評価する」ための素地としたい。そして、3年生時の『AIは哲学できるか』という論説文で「批判的に読む」という学習につなげたい。

また、3年時、文学的文章『故郷』の学習においても、当時の社会情勢から登場人物や筆者の思いを読み取ることから『故郷』の文学作品としての価値を見出すなど、一歩引いた目線で作品を吟味する学習を考えている。それらの活動が、自分の価値観に引張られて偏った評価になってしまうおそれ、著者の論理展開やものの見方を「正しく読みとったうえでの評価」する力につなげるための準備として本単元を位置付けている。最終的には授業における国語

という枠を越え、日常生活におけるさまざまな情報に対し、根拠や主張を正確に理解して自分の意見を積極的にもとうとする姿勢を養いたい。また、自らもいくつかの根拠から積極的に推論を試みる態度も養いたいと願っている。

これまで生徒は説明的文章の学習において、筆者の主張を支える論理的な構成や事例の展開方法に着目してきた。特に、前単元に行った説明的文章『紙の建築』の学習では、筆者の主張を支える4つの事例(経験談)が、それぞれ独立して主張を支える根拠として成立しているのではなく、前の経験が次の活動に生きてくるといった連鎖的な展開になっていることを学んだ。また、単元の学習の終末に、1年次から今までの学習で扱ってきた『ペンギンの防寒着』や『クジラの飲み水』『玄関扉』『意味と意図』『日本の花火の楽しみ』『水の山富士山』の展開方法と比較し、それぞれの論の展開方法を自分たちの言葉で言語化する活動を行った。

本教材は、ただ単に事例同士の並べ方を工夫しているだけでなく、事例に至るまでの展開が秀逸であり、言葉の選び方の工夫も多い。そこで、筆者の「新意見」を読者にどのように説得力ある文章として伝えているか理解することに重点を置き、事例以外にも展開方法や言葉の選び方にどんな工夫があるのか追究することで、論説文に対する理解をさらに深めていきたい。

生徒は「説明文には、既存の仕組みを正確に理解してもらおう文章と、独自の主張を納得してもらおう文章がある」ということには概ね理解しているが、本教材のように、推論が積み重なり、筆者の主張につながる説明文を学習するのははじめてである。そこで、独自の主張を納得してもらうために、既にある事実をもとに仮説を立てて検証する推論が有効であることを理解させる。また、根拠となる事実が明確でない場合、新しい情報や主張は信憑性に欠けるものになってしまうという推論の危険性についても触れたいと思っている。

本校国語科で整理している3つの「学びの実感」を目指す手立てとして、次のような授業展開を設定した。

## 7 研究テーマとのつながり

### ① 「言葉や、言葉の役割の重要性の実感」との関連

文末表現に着目することで、筆者が断言を避けながらも自分の主張に説得力をもたせていることを実感する。

#### 【第3時～第4時】

- ・5～10段落における筆者の工夫を探す際、事実(「だ」「考えらえる」など)と意見(「思っている」「だろう」など)によって語尾を変えていることに気付く。

#### 【第5時】

- ・「ということである」「こののだ」という言葉を使い、筆者だけでなく、調教師や医者や心理学者の力を借りて、上手に自分の意見につながる根拠としていることに気付く。
- ・事例3(歯をさがす象)の終末部分に繰り返し「だろう」が使われることで、推論を用いながらも、筆者が読者に象の「知性」について考えさせていることに気付く。

#### 【第6時】

- ・結論部分の工夫を探す際、「いわば」「とわたしは思っている。」などの言葉が、自分の意見を伝えつつ、断言を避ける有効な言葉であると気付く。

### ② 「追究方法の有効性の実感」との関連

事実に基づいた推論が納得できるものであるならば、不確実な主張であっても説得力のあるものになることを実感する。

#### 【第3時～第4時】

- ・5～10段落における筆者の工夫を探す際、推論に着目して読むと、推論によって主張につながる意見がいくつか提示され、主張に説得力をもたせていることに気が付く。

#### 【第5時】

- ・事例同士がつながっていることに気付く。(『紙の建築』の想起)
- ・1つ目の事例と3つ目の事例に推論が使われ、筆者が鯨や象の知性を「受容的な知性」と定義するための手助けとしている。

#### 【第6時】

- ・24段落の結論で「攻撃的な知性」「受容的な知性」と定義づけられるのは、序論や本論でいくつも推論

を重ね、読者を説得してきたからであることをつかむことで、主張に説得力をもたせるうえで、推論を重ねることの必要性に気が付く。

③ 「題材に表れた価値や人々の考え方に対するものの見方の広がりの実感」との関連

説明文の内容理解によって、象や鯨が高い知性をもっていることや、人間は象や鯨から学ぶべきことがあるという考えが生まれ、生徒の「知性」に関する人間優位の考え方が変容する。また、推論によって人々を納得することができるのだという考え方を獲得する。

【第8時】

・筆者が主張する「人間はもう一方の知性をもつ鯨や象から学び、ガイアの知性へと進化していく必要がある」という考えについて自分はどうか述べて、新たなものの見方、考え方を獲得する。

【参考・引用文献】

中央教育審議会(2016)「幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」

文部科学省(2018)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編

新田克己(2002)「知識と推論」サイエンス社

教育出版社(2025)伝え合う言葉 中学国語2 学習指導書

8 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
①意見と根拠,具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。【(2)ア】	① 「読むこと」において、目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得ることで、内容を解釈している。【(C(1)イ)】 ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。【(C(1)オ)】	①筆者の問いと主張、論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしている。

9 単元計画

時	○学習活動・予想される生徒の発言・目指す生徒の姿	・支援及び留意点 ◎評価
1	<p>○「推論」とは</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いくつかの確かな事例から、おそらくこうだろうと予測すること。予測したことを組み合わせ、結論での主張へとつながる。</li> </ul> <p>○生活の中で推論することはありますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・星の様子で明日の天気を予想することがある。</li> <li>・親のしぐさからその日の機嫌を予想している。</li> </ul> <p>○教科の学習でも推論を使ってきましたか？</p> <p>【社会】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・九州地方の産業の現状を把握した上でより発展するための方法を考え出した時。</li> </ul> <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実験で、いくつかの事実をもとに仮説を立てて、それを決定づける実験を重ねた時。</li> </ul> <p>○推論するときに大切なことは何だと思いますか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・既存の考えから、新しく仮説を立てる発想力。</li> <li>・前提となる事実が間違っていないこと。</li> </ul> <p>○本文範読</p> <p>○単元課題について知ろう</p> <p>単元課題：不確かな事実についての主張に説得力があるのはどんな工夫があるからなのか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・推論は、結論を生み出すまでのプロセスであることを確認する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆者の論の展開方法に注意して聞かせる。</li> </ul> <p>◎本時は評価なし</p>
2	<p><b>本文の構成をつかもう。</b></p> <p>○説明文の学習で初めにやっていることを思い出して、文章の構成について理解しよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・序論、本論、結論に分けよう。</li> <li>→序論は①～⑦、本論は⑧～⑲、結論は⑳～㉑。</li> <li>・問題提起、答え、主張を探そう。</li> <li>→問題提起：④どうして野生の動物に対して畏敬の念まで抱くようになってしまうのだろうか。</li> <li>・⑩は問題提起ではないのか。</li> <li>・⑩は④を解決するための問い(仮説)だと思う。</li> </ul> <p>主張： ㉑人間は彼らからもう一方の側面の知性から学び、「ガイアの知性」に発展すべきである、と私は思っている。</p> <p>○「と、私は思っている」という語尾から分かることは？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・科学的に証明されているわけではなく、あくまで筆者の新しい意見だということ。</li> <li>・事例は本論にいくつあるだろう。</li> <li>→オルカの芸⑫～⑯、イルカ語を教えるイルカ⑰～⑲、肉親の歯を捜す象⑳～㉑</li> </ul> <p>○㉑はどのような段落だろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・㉑は、事例から導かれる結論だ。</li> <li>・㉑を受けて㉑で主張しているということだ。</li> </ul> <p>○では、問題提起④から、事例⑫に入るまでの⑤～⑩はなんだろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの説明文の学習を活かし、自分たちで取り組ませる。</li> </ul> <p>◎文章の構造や筆者の問いと主張、について内容の解釈しようとしているか。[主体的に取り組む態度]</p> <p>◎本文が意見と事実から成り立っていることを理解できているか。 [知識・技能]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・㉑㉑が事例で検証した答えとなっていることを確認する。</li> </ul> <p>・次時の学びにつなげる問いとする。</p>

<p>3</p>	<p>主張に説得力をもたせるために⑤～⑩にどんな工夫があるのか</p> <p>○問題提起と事例の間に述べられている内容をつかみながら効果を考えよう。</p> <p>⑤…体の大きな生物は生きるのが難しいとされている。彼らは何か私たちに重大な示唆を与えようとしているのではないかとさえ思う。</p> <p>⑥…鯨、象が人とほぼ対等の精神活動ができる高度な知性をもっている。また、三種の成長過程もほぼ同じである。</p> <p>⑦…鯨と象と人は確かに似ているが、明らかに人と他の2種は何かが決定的に違っている。</p> <p>⑧…現代人は、言葉や文字を生み出し、科学を発展させる能力こそが「知性」だと思い込んでいるため、鯨や象に 我々と匹敵する知性があるとんでも素直に信じられないだろう。</p> <p>⑨…自らは何も生産せず、自然が与えてくれたものだけを食べて生き、あとは何もしていないように見える鯨や象が、自分たちと対等の「知性」をもった存在とはとても思えないのは当然だ。</p> <p>⑩…1960年代に入って、この常識に疑問が生まれ始めた。</p> <p>⑪…鯨や象は、人の「知性」とは全く別種の「知性」をもっているのではないか。あるいは、人の知性はこのガイアに存在する大きな「知性」の偏った一面の現れであり、もう一方の面に鯨や象の「知性」が存在するのではないか。</p>	<p>・文末表現の仕方、文や段落の役割、段落相互の関係に着目させる。</p> <p>→<b>学びの実感2</b></p> <p>◎内容を解釈しながら、筆者の推論の工夫をつかむことができているか。[思考・判断・表現]</p> <p>◎論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしているか。 [主体的に取り組む態度]</p>
<p>4 (本時)</p>	<p>主張に説得力をもたせるために⑤～⑩にどんな工夫があるのか</p> <p>【⑤について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑤で結論につながる自分の思いを述べている。②につなげるために、④で出た問題提起を受けて先に少し仕掛けている。</li> <li>・ここに括弧書きで事実を交えることで意見に説得力をもたせている。</li> <li>・事実に基づいて意見を入れているところから、すでにここに小さな推論が使われているといえる。</li> </ul> <p>【⑥について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑥があることで、畏敬の念をもつ理由は、「知性」に関係していると読者に伝わるから、⑩の「知性」についての仮説が読者にすんなり入ってくるのが伝わる。</li> <li>・⑥で、体の大きさや成長過程(寿命)から、人間と象・鯨はほぼ対等の精神活動ができると言われている事実を出すことで、別種の「知性」について比較することに正当性をもたせている。</li> <li>・ここで、読者の「人間&gt;鯨・象」という無意識の偏見を事実で修正しようとしていると感じる。</li> <li>・「だろう」と終わっていることから、最後に推論として自分の意見を入れている。</li> <li>・ここで、人間も、そして鯨も象も多くのことを学んで今に至っているということ、つまり、人間が学ぶべき知性を彼らがもっているということ伝えていたのではないか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・⑤～⑩を黙読してから取り組ませる。</li> <li>・前時の小集団の続きから始める。</li> <li>・語尾に注目させ、⑤に推論が使われていることに気づかせる。 →<b>学びの実感①</b></li> <li>・語尾に着目させ、⑥にも事実に基づいた推論が使われていることに気づかせる。 →<b>学びの実感①</b></li> </ul>

	<p>【⑦について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読者の思考に寄り添った形となっている。読者は「人間の方が優れているから当然違いがある」と思う。一方筆者は「両者は対等だが知能の種類に違いがあり、人間は鯨や象から学んでほしい」と思っている。「違う」という点ではお互い(筆者も読者も)一致しているようにしているところがテクニックであると感じる。</li> </ul> <p>【⑧について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・知能について人間が一番優れているという思い込みを解こうとしている。</li> <li>・でも、思い込みなんだっていただけだど反論されるから、「まずほとんど信じないだろう」などと言って読者に寄り添うことで、反論をおさえている。</li> </ul> <p>【⑨について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑨も、読者に寄り添って、鯨や象の見方について一般の人が考えそうなものを挙げて寄り添っている。</li> <li>・ここでも括弧の中に「実はそうではないのだが」と入れて、さりげなく読者に自分の考えを入れている。</li> </ul> <p>【⑩について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見だけでなく、鯨や象たちと深いつき合いをするようになった人から疑問が生まれたということで説得力をもたせている。</li> <li>・⑩の疑問(仮説)をもっともなものとさせるための重要な段落と言える。</li> </ul> <p>○本日の学びを振り返ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読者が⑩の疑問(仮説)を受け入れるために⑤～⑩がとても重要な役割を担っていることが分かった。事実と意見をバランスよく入れ、読者に寄り添いながらも両者の「知能」がどちらも同等に高度なものだと読者に伝えていく展開が巧妙だった。</li> <li>・⑤から⑩がないと、読者は⑩の仮説や3つの事例を素直に受け入れることができないだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単に⑩の仮説につなげる、という意見しか出ないようであれば、読者と筆者の「違い」に対する認識のずれについて考えさせる。</li> <li>・読者の思いに寄り添う、という意見しか出ない場合、「思い込んでいる」という主張につながる言葉を選んでいることに着目させる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">→学びの実感①</p> <p>◎内容を解釈しながら、筆者の論の展開の工夫をつかむことができているか。[思考・判断・表現]</p> <p>◎論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしているか。 [主体的に取り組む態度]</p>
5	<p>3つの事例は、結論④を導くためにどのように工夫されているだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・【オルカの芸】 オルカは単に餌がほしいからではなく、か弱い人間を「友」とみなして思いやり、人間を楽しませるとともに、自らも楽しむために芸をして生きていこうとする「心」があると述べている。</li> <li>・【イルカ語を教えるイルカ】 イルカは、人間と対等で良好な関係を築こうとし、言語を教えることのできる知性をもっているということを伝えている。</li> <li>・【肉親の歯を捜す象】 大切な存在の形見を守ろうとする高い知性が述べられている。</li> <li>・仮説を検証するために、例が3つ必要だろうか。</li> <li>・1つだけでは、「たまたまそういう行動をとっているだけではないか」という読者の反論に耐えられないから、3つあるのだろう。</li> <li>・それだけではなくて、事例同士がつながっているように感じる。オルカの例があるから、イルカの例により説得力をもたせているんだ。そして、</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の内容を想起させ、事例が仮説を裏付けるものとなっているか検証する。</li> <li>・文末表現から、それぞれの事例にも、事実から推測されることを推論として述べていることに気づかせる。→学びの実感①</li> <li>・事例同士が関連し合って仮説の検証を行っていることに気づかせ、</li> </ul>

	<p>2つの例があるから象の例が成り立つという風に。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・確かに、1つ目の事例で、「人間を「友」として受け入れる」や「自分自身も生きることを楽しむ「心」がある」と書いてあるからこそ、2つ目の事例もそういった思いをイルカがもって人と接していることが伝わりやすいね。</li> <li>・1つ目と2つ目の違いは何かな。</li> <li>・1つ目はあくまで人間が上の立場で芸をしているオルカという構図だけれど、2つ目は動物と人間が対等の立場に立っている例だと思う。</li> <li>・じゃあ、3つ目は？象の例は必要かな。</li> <li>・象の例がないと、体の大きな動物が受容的な知性をもっていることを証明するには弱いからではないか。</li> <li>・どうして象の例だけ「だろう」で終わる文が多いのかな。</li> <li>・他の2つの事例によって、野生動物にも高い知性があるということを読者に納得させている。だから、象の部分はあえて「だろう」という疑問形でも読者がそれは高い知性に基づく行動であると予想できるかたちとなっているのではないかな。</li> <li>・つまりここにも推論(事実に基づく予想)が使われているということだ。</li> </ul> <p>○この3つの事例は、仮説を導き出すもの？仮説を実証するもの？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・両方じゃないかな。</li> <li>・「別種の知性」とは、結論で述べたい「受容的な知性」なのだということを説得させたいから、全て攻撃的な事例については書かれていない。人間と対比させるために、3つの事例は有効。人間の偏った「知性」についても暗に説明できている。</li> <li>・同時に、この3つの例は、実は人間が本当はもっている(または忘れずにもっておきたい)知性ともいえると思う。</li> </ul>	<p>『紙の建築』での学習を想起させる。→<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学びの実感②</span></p> <p>◎3つの事例が、仮説を導きつつも仮説を裏付ける事例として有効な事例となっていることをつかむことができていないか。</p> <p style="text-align: right;">[思考・判断・表現]</p> <p>◎論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしているか。</p> <p style="text-align: right;">[主体的に取り組む態度]</p>
<p>6</p>	<p>○結論と主張の内容をおさえよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・㉓で、鯨や象に高度な「知性」があることをもう一度おさえている。</li> <li>・㉔で、人間の攻撃的な知性と比較しながら、鯨や象の受容的な知性について主張している。</li> <li>・㉕では、人の攻撃的な知性と鯨・象の受容的な知性があるという前提のもとで、人は彼らから学ぶ必要があると思うという推論で結論付けている。</li> </ul> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">○結論には、どんな工夫があるだろうか。</span></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「たぶん間違いない」とか、「いわば」という言葉を使い、読者の反論をおさえつつ考えを提示している。</li> <li>・あえて人間の「知性」の良い部分が書かれていない。これを書きすぎると、かえって主張である、「彼らから学ぶ」という考えが薄まってしまう。</li> <li>・主張の最後の一文は、「と、私は思っている」という終わり方である。これが推論から成り立ったあくまで自分の意見であるということを読者に伝えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「人間の「知性」による側面を書く」とどうなるだろうか問う。</li> <li>・言葉の選び方に注目させ、反論を避けつつも主張に説得力をもたせようとしている工夫に気づかせる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">→<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学びの実感①</span></p> <p>◎結論が、これまでの事例に基づく推論に支えられた上で説得力をもっていることをつかむことができていないか。[思考・判断・表現]</p> <p style="text-align: right;">→<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">学びの実感②</span></p> <p>◎論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしているか。</p> <p style="text-align: right;">[主体的に取り組む態度]</p>

<p>7</p>	<p>単元課題に取り組もう</p> <p>単元課題:筆者の主張に説得力があるのはどんな工夫があるからなのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・動物の知性という、立証しづらいことを、事実と事実から推論できる仮説を混ぜながら読者に納得させている。</li> <li>・語尾を巧みに変更して、事実と、事実に基づく意見の区別がつきやすい。</li> <li>・人間である読者が反感をもってしまわないよう、序論の後半や本論の前半で読者の目線に寄り添った内容を入れている。</li> <li>・「人間の知性が劣っているとやりたいのか」と反論されないように、あくまで我々人間とは全く別種の「知性」をもっているのではないかという仮説を立て、その側面から人間は学んでほしいという展開にしている。</li> <li>・仮説を立証させるために、事例を3つ用いているが、それぞれが相互に支え合うことでより説得力が増していた。これは『紙の建築』で学んだ事例の用い方と似ていて、大事な手法だと思った</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本単元で学んだことから、筆者が不確かなことを伝えるためにどのような工夫をしているか、自分の意見を書かせる。→<b>学びの実感①②</b></li> </ul> <p>◎文章の論理展開や表現の仕方について理解したことや考えたことについて書くことで、自分の考えを広げたり深めたりすることができているか。 [思考・判断・表現]</p> <p>◎推論を用いて主張する文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結びつけ、自分の考えを広げたり深めようとしているか。 [主体的に取り組む態度]</p>
<p>8</p>	<p>◎筆者の主張について自分の考えを述べよう</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筆者の言うように、人間は科学の発展を重視するあまり、環境を破壊してしまっている。私は最初は人間が鯨や象から学ぶ必要なんてないと思っていたけれど、本来人間も持っているはずの「受容的な知性」の側面について考え直し、地球を大切にすることを前提に科学の発展も成し遂げていけるとよいと思った。</li> </ul> <p>◎単元の振り返りをしよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今までにないことの提案に説得力をもたせることができるという点で、これまでの事実を組み合わせて推論する力はとても大切だと思った。私も推論を上手に使うって考えを伝えられるようになりたい。</li> <li>・すでに分かっていることを分かりやすく説明する説明文(『ペンギンの防寒着』『水の山 富士山』など)とは違い、推論は、新たな論を展開するため、反論されやすい性質をもっている。反論をかわすために、より読者の思いを踏まえて論を展開する必要がある。また、推論を納得させるための事実ははっきりしている必要があるし、そこから考えられることも妥当だと思われるよう気をつけなければいけないと知った。</li> </ul>	<p>◎筆者の主張について知識や経験と結びつけて意見を述べることで、自分の考えを広げたり深めようとしているか。 [主体的に取り組む態度]</p> <p>→<b>学びの実感③</b></p> <p>◎文章の論理展開や表現の仕方について理解したことや考えたことについて書くことで、自分の考えを広げたり深めたりすることができているか。 [思考・判断・表現]</p> <p>→<b>学びの実感③</b></p>

10 本時の授業

(1) 授業名 「事例に入る前の筆者の工夫を探ろう」

(2) 目標 問題提起から事例に入る前の段落の内容を読むことを通して、読者の思考に寄り添いながらも、事実をもとに自分の意見を織り交ぜていく推論のプロセスをつかむことができる。〔思考力、判断力、表現力等C〕

(3) 授業過程

学 習 活 動	・支援及び留意点 ◎評価	形態・時間
<p>○【⑤について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑤で結論につながる自分の思いを述べている。②につなげるために、④で出た問題提起を受けて先に少し仕掛けている。</li> <li>・ここに括弧書きで事実を交えることで意見に説得力をもたせている。</li> <li>・事実に基づいて意見を入れているところから、すでにここに小さな推論が使われているといえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・⑤～⑪を黙読してから取り組ませる。</li> <li>・前時の小集団の続きから始める。</li> <li>・語尾に注目させ、⑤に推論が使われていることに気づかせる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">→学びの実感①</p>	<p>5分 (全体)</p> <p>6分 (小集団)</p> <p>32分 (全体)</p>
<p>【⑥について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑥があることで、畏敬の念をもつ理由は、「知性」に関係していると読者に伝わるから、⑪の「知性」についての仮説が読者にすんなり入ってくるのが伝わる。</li> <li>・⑥で、体の大きさや成長過程(寿命)から、人間と象・鯨はほぼ対等の精神活動ができると言われている事実を出すことで、別種の「知性」について比較することに正当性をもたせている。</li> <li>・ここで、読者の「人間&gt;鯨・象」という無意識の偏見を事実で修正しようとしていると感じる。</li> <li>・「だろう」と終わっていることから、最後に推論として自分の意見を入れている。</li> <li>・ここで、人間も、そして鯨も象も多くのことを学んで今に至っているということ、つまり、人間が学ぶべき知性を彼らも持っているということ伝えたいのではないか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・語尾に着目させ、⑥にも事実に基づいた推論が使われていることに気づかせる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">→学びの実感①</p>	
<p>【⑦について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・読者の思考に寄り添った形となっている。読者は「人間の方が優れているから当然違いがある」と思う。一方筆者は「両者は対等だが知能の種類に違いがあり、人間は鯨や象から学んでほしい」と思っている。「違う」という点ではお互い(筆者も読者も)一致しているようにしているところがテクニックであると感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単に⑪の仮説につなげるはたらしきがある、という意見しか出ないようであれば、読者と筆者の「違い」に対する認識のずれについて考えさせる。</li> </ul>	
<p>【⑧について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・知能について人間が一番優れているという思い込みを解こうとしている。</li> <li>・でも、思い込みなんだっていただけだと反論されるから、「まずほとんど信じないだろう」などと言って読者に寄り添うことで、反論をおさえている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・読者の思いに寄り添う、という意見しか出ない場合、「思い込んでいる」という主張につながる言葉を選んでいることに着目させる。</li> </ul> <p style="text-align: right;">→学びの実感①</p>	
<p>【⑨について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・⑨も、読者に寄り添って、鯨や象の見方について一般の人が考えそうなものを挙げて寄り添っている。</li> <li>・ここでも括弧の中に「実はそうではないのだが」と入れて、さりげなく読者に自分の考えを入れている。</li> </ul>		
<p>【⑩について】</p>		

<p>・自分の意見だけでなく、鯨や象たちと深いつき合いをするようになった人から疑問が生まれたということで説得力をもたせている。</p> <p>・⑪の疑問(仮説)をもっともなものと思わせるための重要な段落と言える。</p> <p>○本日の学びを振り返ろう</p> <p>・読者が⑪の疑問(仮説)を受け入れるために⑤～⑩がとても重要な役割を担っていることが分かった。事実と意見をバランスよく入れ、読者に寄り添いながらも両者の「知能」がどちらも同等に高度なものだと読者に伝えていく展開が巧妙だった。</p> <p>・⑤から⑩がないと、読者は⑪の仮説や3つの事例を素直に受け入れることができないだろう。</p> <p>目指す生徒の姿:事実に基づく推論で、説得力ある論展開を試みている筆者の工夫を理解している姿。</p>	<p>◎論の展開について複数の情報を整理しながら内容を解釈しようとしているか。 [主体的に取り組む態度]</p> <p>◎推論に着目しながら内容を解釈し、筆者の論の展開の工夫をつかむことができているか。[思考・判断・表現]</p> <p>→学びの実感②</p>	<p>7分 (個人)</p>
---	--	--------------------